

<論 文>

英語のAspectについて

宗宮 喜代子

1. はじめに

オットー・イエスペルセンによれば、英語は論理的一貫性 (logical consistency) を指向する言語である。ただし「論理」とは、西欧の記号論理学を指すのでもなければ、文法の体系性や形式性 (すなわち明示性) だけを取りたてて呼ぶものでもない。論理とは、言語外世界を整合的に成りたさせている自然の理である。従って、英語が論理的であるとは、むしろ文法から自由に、自然の理に従おうとすることである。たとえば、厳密な格標示に依存することなく自然な SVO の語順を守ることであり、現実に応じて単数形の名詞 *family* を複数の *they* で照応したり、逆に複数名詞を単数扱いして *for a quiet twenty minutes* と言ったりすることである。つまり英語の文法は自然の理を組みこんでいる。次に、「一貫性」とは、規則の適用範囲が明確で、その範囲内の事象に例外なく適用されることである。そこで時制を見ると、デンマーク語やドイツ語と違って英語では *he saw* と *he has seen* が厳密に区別される。また、フランス語と違って *I write* と *I am writing* の区別が現在時制と過去時制に一貫して適用される。さらに、こういった形式があらゆる動詞に網羅的に適用される点においてスラブ語より優れている。(Jespersen 1938:10-16)

英語の時制の一貫性についてはイエスペルセンの解説に委ねるとして、では英語の時制の一貫性はどんな論理、自然の理、に支えられているのだろうか。この問への答を提案するのが本稿の目的である。本稿では、「外と内の視点」の原則が働いているという仮説を提案し、特にAspectに焦点を絞ってこの仮説の概要を述べる。

ちなみにイエスペルセンの言う「時制」には過去分詞 (-ed 形) と現在分詞 (-ing 形) の表す文法概念が含まれている。伝統文法ではこのように、Aspectは時制の下位範疇とみなされていた。

ライオンズによれば、Aspectを時制と呼ぶ習慣は偶然の産物である。ギリシア時代に、時間における前後の関係が発見され、これをアリストテレスが「時制」と呼んだ。その後ストア学派によって完了や未完了という性質が発見されたが、こちらは「完了時制」「未完了時制」と呼ばれるようになった。このような歴史的偶然が災いして、Aspectは伝統文法において時制ほどには注目されなかった。しかし実際には、世界中に時制をもたない言語は多数存在しても、Aspectをもたない言語はほとんどないのである。(Lyons 1977:704-5)

2. アスペクトとは何か

アスペクトとはアスペクチュアリティを表すための文法範疇であり文法概念である。これは、時制が時間を表し、法が法性を表すことと平行する。アスペクトを論じるには時制や法を視野に入れる必要があるため、冒頭でこれらに言及する。また本稿では適宜、アスペクトを相、アスペクチュアリティを相性（そうせい）と呼ぶ。

2.1. 言語と言語外世界

法、時制、相が言語に属する文法範疇である一方で、法性、時間、相性は言語外世界に属する事象である。言語外世界のうち、法性は話者の心的世界に属し、時間と相性は現実世界に属する。ただし法性、時間、相性といった言語外の事象が、文法範疇のみでなく語彙や構文によっても表現されるのは言うまでもない。

表1 言語と世界の対応

文法範疇	言語外事象
法 (mood)	法性 (modality)
時制 (tense)	時間 (time)
相 (aspect)	相性 (aspectuality)

相が相性を表す、と言うだけでは同語反復のそしりを免れない。そこで本稿では、法、時制、相をそれぞれ次のように定義する。

法は、事態の蓋然性に関する話者の心的態度を表す文法範疇である。

時制は、事態の時間的位置を直示的に表す文法範疇である。

相は、事態の時間的性質を表す文法範疇である。

法、時制、相の定義のうち、時制と相の定義は基本的にバーナード・コムリー (Comrie 1976; 1985) の次の見解を援用した。

A system which relates entities to a reference point is termed a deictic system, and we can therefore say that tense is deictic. (Comrie 1985:14)

(存在を基準点に関連づける体系は直示的体系と呼ばれる。従って、時制は直示的であると言える。)

Aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation.

(Comrie 1976:3)

(相とは、ある事態の内的な時間的あり方の、さまざまな見方である。)

2.2. 時制と相:外と内の視点

時制が直示的であるとは、事態の時間を話者が外側から捉え、話者自身がいる発話時あるいは文脈が作り出す基準時と相対的に、その時間が過去か現在かを見極めるということである。事態の様相は問題にならず、当該の時間1は、発話時など基準となる時間2との時間的前後関係に関してのみ理解される。

相が事態の時間的性質を表すとは、事態がどんな基準時とも関係をもたず、当該の時間1の中でどのような様相を呈しているかが問題になるということである。つまり事態が単に存在しているか、完了しているか、進行中であるか等が重要である。比喩的な言い方をすれば、相においては話者が当該の時間1の中を覗きこんでいる。

時制と相が時間を外と内から見るように、英文法の他の領域でも外と内の視点が観察される。

- (1) a. There is no school in this neighborhood. (この近辺には学校がない)
- b. There's no school on weekends. (週末には学校がない)

- (2) a. Joe is in the garden. (ジョーは庭にいる)
- b. Joe is a gardener. (ジョーは園芸好きだ)

- (3) a. Mary found the cat. (メアリーは猫を見つけた)
- b. Mary found the cat charming. (メアリーは猫を可愛いと思った)

(1a)は建物としての「学校」を、(1b)は内側の活動を見ている。これはメトニミーの例でもあり、この他に I gave him the book における物体としての「本」と I read the book における情報としての「本」など、この種の例は多い。(2a)と(2b)では be 動詞が外と内からジョー

なる人物を描写している。¹ (3a)の SVO 文は猫の外形に言及し、(3b)の SVOC 文は猫の「内的構成」から1つの特徴を取り出して描写している。

このように個体が外側と内側をもつことは自然の理であり、多くの言語が何らかの形でこの「外と内」の区別を文法に組み込んでいる。しかし少なくとも英語においては、この2分法が、空間の存在である個体のみでなく、時間の存在である事態にも及んでいる。そのことを明瞭に示すのが時制と相の体系である。そこで本稿の仮説はこうなる。

本稿の仮説：英語の時制と相の体系には「外と内の視点」の原則が働いている。

この仮説については本稿の第4節で論じる。次いで第5節では、この「外と内の視点」の原則によって事態が個体に準じる存在として理解できることを論じる。

3. 先行研究における時制と相

この節では近年のおもな先行研究を概観する。コムリーの画期的な提案があったにもかかわらず、英語学では依然として特に完了相に関して見解が分かれ、迷走状態が続いている。

時制に関しては、早い時期にイエスペルセンが2時制を明言している。

... several other great changes affecting equally all the Germanic languages. One of the most important is the simplification of the tense system in the verb, no Germanic language having more than two tenses, a present and a past. (Jespersen 1938:26)

(…その他いくつかの大きな変化が全ゲルマン語を等しく襲った。その中でもっとも重要な変化のひとつが動詞における時制体系の単純化であり、その結果、どのゲルマン語も現在と過去の2時制より多くの時制をもつことはなくなったのである。)

これと呼応するかのように、近年の英語学プロパーの研究では基本的に2時制を認める立場が大勢を占めている (Palmer 1965; Leech 1971; Quirk et al. 1985; Berk 1999; Greenbaum and Nelson 2002; Huddleston & Pullum 2002; Hewings 2005)。一方、言語類型論や通言語的な視点をもつ研究では、他言語に見られる3時制の考えを英語にも適用し、現在時制と過去時制に加えて、willによって標示される未来時制が想定されている (Comrie 1985; Dixon

¹ be 動詞に二重の機能があることは、Huddleston & Pullum (2005:76)でも各々「指定的用法 (specifying use)」「帰属的用法 (ascriptive use)」として指摘されている。

1991; Saeed 1997; Declerck 2006; Griffiths 2006).

相に関しては、これらの全研究が英語に進行相の存在を認めている。進行相は活動の持続を表すという理解も共有されている。

研究者たちを悩ませてきたのは完了相である。完了は相か時制かで見解が分かれている。また、無相つまり相が明示されない場合に、これを1つの相とみなして単純相という名称を与えるか、あるいは非進行相、非完了相と呼ぶかで立場が分かれている。以下では、特に完了に焦点を当てて、近年のいくつかの先行研究を要約する。

パーマー (Palmer 1965) は、take のパラダイムを例に挙げて、takes, took, is, was, has, had は時制を標示し、has や had に続く taken, been は局面 (phase) を、taking, being は相を標示するとしている (Palmer:32)。その上で、時制と局面を1つの章で記述し、相を別の章で記述している。つまりパーマーは、本稿で呼ぶところの完了相を時制に近い文法範疇とみなし、進行相のみを相とみなしていた。

「完了」については、過去の活動の「現在との関連性 (current relevance)」を重視した。関連性という概念によって説明することで、I've been reading for an hour など過去の活動が現在まで続いている場合や、I've cut my finger など過去の活動の結果が現在にある場合、さらには I've hit it twice, but it's still standing up など結果が得られなかった場合までも包括的に説明することができる (Palmer:47-8)。

しかし、このように「完了形 (perfect form)」の用法を説明しながらも、パーマーは「局面とは何か」を定義していない。局面が文法範疇であるのか現実であるのかすら曖昧なままである。

リーチ (Leech 1971) は2時制2相の時制体系を提案した。リーチによれば、過去時制と完了相はどちらも過去の時間を表す方法であり、完了相は現在と関係のある過去の時間 (past-time-related-to-present-time) を表す (Leech:35)。

リーチは、現在完了においては過去の確定的な時間が明示されることがないことに注目し、確定・不確定に関する単純過去と完了相のこの違いは、定冠詞 the と不定冠詞 a の用法に平行すると指摘した (Leech:42)。つまり指示対象が確定されている時に the を使用するように、過去のできごとの時間が確定されている場合には過去時制を用いるのである。この指摘を受ける形で、デクラーク (Declerck 2006:320-22) はさらに、「the+名詞句」が生起する文においては過去時制を用いる傾向があることを検証している。ただし、確定性についてはすでにイエスペルセンに、"Did you finish?" asks about some definite portion of past time (Jespersen 1931:61) という記述がある。

話者の視点によっても用法が分かれる。たとえば Now where did I put my glasses? では話

者は眼鏡を失くした瞬間に意識を向けている。一方、Now where have I put my glasses?では今の状態に注意を向けており、Where are they now?が第1の関心事である。(Leech:43)

先のパーマーでもリーチでも、説明すべき現象と問題意識は今日と変わらない。リーチに至っては完了相が設定された。また、時間の確定性に着目した提案が行われ、文中にyesterdayなどの副詞が生起する場合には義務的に過去時制になることの説明ができた。話者の関心という新しい要因も導入された。それでも依然として相の本質を把握していないため、表2のような不必要に複雑な体系を提案する結果になった。

表2 リーチ (Leech 1971) の時制と相の体系

	(non-progressive)	Progressive Aspect
(non-perfect)	Simple Present Tense <i>he sees</i>	(ordinary) Present Progressive Tense <i>he is seeing</i>
	Simple Past Tense <i>he saw</i>	(ordinary) Past Progressive Tense <i>he was seeing</i>
Perfect Aspect	(ordinary) Present Perfect Tense <i>he has seen</i>	Present Perfect Progressive Tense <i>he has been seeing</i>
	(ordinary) Past Perfect Tense <i>he had seen</i>	Past Perfect Progressive Tense <i>he had been seeing</i>

表2で、大文字の Progressive Aspect (進行相), Perfect Aspect (完了相), Present Tense (現在時制), Past Tense (過去時制), 小文字で括弧入りの non-progressive (非進行), non-perfect (非完了) はどれも文法範疇の名称である。Aspect (相) という名称は、完了相と進行相という主要な範疇にのみ使用する。ordinary は完了と進行のうち一方の相を表す範疇を指し、Simple はどちらの相をも標示しない範疇を指す。(Leech:4)

クワークら (Quirk et al. 1985) は、時制と時間の違いを強調して、未来時制を設定しない立場を表明する。英語には現在と過去を表す動詞形態は存在するが未来を表す動詞形態は存在しないからである。さらに、現在時制が過去の時間と未来の時間を含むことから「非過去 (non-past)」という名称を提案する傾向を批判して、時制と時間は別ものであり、「現

在時制」とするのが望ましいとする。(Quirk et al.:176)

相についてはリーチと同様に完了相 (perfective) と進行相の2相を想定している。コムリーを分岐点とするかのように、クワークらにおいては相の定義に変化が見られる。

The term ASPECT refers to a grammatical category which reflects the way in which the verb action is regarded or experienced with respect to time. Unlike tense, aspect is not deictic, in the sense that it is not relative to the time of utterance. (Quirk et al.:188)

(「相」という用語は、動詞が表す行為が時間に関してどのように見られ、あるいは経験されるかを反映する文法範疇を指す。時制と違って相は直示的ではない。相は発話の時間と相対的でないからである。)

これは今日を代表する見解であるが、依然として外と内の視点を徹底しておらず歯切れが悪い。実際に次の箇所では戸惑いが表明されている。

In fact, aspect is so closely connected in meaning with tense, that the distinction in English grammar between tense and aspect is little more than a terminological convenience which helps us to separate in our minds two different kinds of realization: the morphological realization of tense and the syntactic realization of aspect. (Quirk et al.:189)

(実際、相は意味の上で時制と緊密に関連しており、英文法において時制と相を区別するのは、時制を形態的に表し相を統語的に表すという2つの異なる実現形式をわれわれが頭の中で区別しやすくするための用語上の便法以上のものではない。)

意味的に似ていることがらに「時制」と「相」という異なる名称を与えて区別するのは、実現形式の違いをイメージするための便法だ、とは、相の意味が今ひとつ分からないと認めるに等しい。

しかし「時制が動詞の語形態で表され、相は2語を連結して統語的に表される」と述べられている部分は示唆に富んでいる。時間を外側から直示的に捉える時制は、動詞形態に上乘せして簡潔に表現され、時間の内側を見る相は、より長い形式で表現される。このことは、先の2.2の例文(3)で見た、猫の外形に言及する時は簡潔にSVOで表し、特徴に言及する時にはSVOにCを足して、つまり「統語的に」表す方法と平行している。

さて、よく分からないと言いながらも、クワークらは、完了相の最も包括的な特徴として「時制などが合図する時間に先立つ時間 (anterior time)」(Quirk et al.:190) という概念を

強調した。この anteriority は「完了相が表す過去の時間」ということになるが、これが「過去時制が表す過去の時間」とどう違うのかは判然としない。

彼らはまた、従来、完了相と進行相の両方を欠く動詞句を「単純 (simple)」と呼んでいたことを改め、一方だけを欠く場合も「単純」に含めることを提案した (Quirk et al.:189)。しかし、これは残念な一歩であった。両方を欠くものだけを取り分けて、これを「単純相」と呼べば、整合的な時制体系が得られたはずである。

ハドルストンとパラム (Huddleston and Pullum 2002; 2005) (これ以降 H&P)においては、主要時制である過去時制と現在時制の他に、副次時制として「完了」という名称の過去時制が設定された。たとえば表3の has gone において、has 自体は現在時制であるが、has gone は perfect であり、perfect は過去時制の一種である (H&P 2002:116)。

H&P では、完了が再び「時制」の範疇に押し戻されてしまった。直示的であることは時制の定義的特徴ではなくなり、「先立つ時間 (anteriority)」を表していることが重要視された。こうして、has は現在時制であるが has gone は過去時制であるという、直観的には理解しがたいパラダイムが提案された。

表3 ハドルストンとパラム (H&P 2002) の時制と相の体系

体系	用語	標示の方法	例
主要時制 (Primary tense)	過去時制 (Preterite)	過去時制を表す屈折	went
	現在時制 (Present)	現在時制を表す屈折	goes
副次時制 (Secondary tense)	完了 (Perfect)	have + 過去分詞 (have + past participle)	has gone
	非完了 (Non-perfect)	特に標示なし	goes
相 (Aspect)	進行相 (Progressive)	be + 動名詞分詞 (be + gerund-participle ²)	is going
	非進行相 (Non-progressive)	特に標示なし	goes

² この用語は、従来の動名詞と現在分詞を同一範疇の2つの機能とみなす H&P の立場を表している。

本稿では、時制と相の本質的な違いは直示性の有無であると考え、しかしH&Pは直示性を軽視した上に、先立つ時間 (anteriority) を重視するあまり現在との関連性 (current relevance) を軽視し、現在完了形を過去時制とみなした。この「過去時制」が常に完結 (perfective) という相性を表すことについては、解釈に属する問題とされた。

直示性を見失うと時制の範疇は複雑になる。デクラーク (Declerck 2006) は時制を、事態の時間 (situation time) と基準の時間 (orientation time) の関係によって定義した。基準の時間は発話の時間 (speech time) であることが多いが、そうでなくともよい。また、時制を表すのは動詞であるが、動詞の屈折形態に限るわけでもない (Declerck:96-7)。

こうして直示性を時制の定義から外し、動詞の屈折形態という制約をも外すと、現在完了は時制の定義に合致する。デクラークによれば、現在完了は現在時制でも過去時制でもない独自の時制である (Declerck:108)。こうして現在時制と過去時制に加えて未来時制、現在完了、過去完了、未来完了、would soon find out など条件時制 (conditional tense)、would have left など条件完了 (conditional perfect) といった時制が設定される。ただし、発話時を基準とする時制を絶対時制 (absolute tense) として、それ以外の相対時制 (relative tense) と区別している。絶対時制は、現在、過去、現在完了、未来の4つである (Declerck:153)。

デクラークにおける発話時、基準時、事態時の考えはライヘンバック (Reichenbach 1947) に由来する。他に、ライヘンバックのできごと時 (point of the event)、基準時 (point of reference)、発話時 (point of speech) のモデルを改良することで時制と相を説明しようとした研究としてハーダー (Harder 1994) が挙げられるが、成果が得られたとは言い難い。

その他の研究においても、相は時制と同列に語られる傾向が根強い。ベーチ (Bache 1994) は構造主義の方法を援用して時制と相を意味素性によって分析し、anteriority, simultaneity, posteriority をはじめ、perfective/imperfective, directed, punctual などの素性を提案した。しかしこの研究もまた、相の理解においてコムリー以前の段階にあると言わねばならない。

相に特化した最近の研究では、ホヴァヴ (Hovav 2007) がヴェンドラーの4分類を検証し、相性が文脈に大きく依存している実態を明らかにした。本稿では第5節でヴェンドラーの4分類に言及する。

英語学での専門的な議論とは別に、実際の教育の現場では3相説が浸透している。ヒューイングズ (Hewings 2005) では、現在 (present) と過去 (past) の2時制と、単純 (simple)、継続 (continuous)、完了 (perfect) の3相が想定されている。「継続相」は、通常の進行相と同じ形式を指している。この著書は用法を中心とした解説書であり、「時制」や「相」という用語を用いることもなく文法観も述べられていないが、実質的に単純相を設定して他の

2つの相と対比させた点で、クークらの残した課題をうまく解決した結果になっている。同様に、意味論の入門書であるグリフィス (Griffiths 2006) も3相を想定している。

4. 2時制3相の体系

英語学の先行研究においては、コムリーが提案した「時制は外の視点、相は内の視点」という洞察が十分に生かされているとは言い難い。相は内の視点という原則を見失わず、その上でこの2分法を繰り返し相の分類に適用すれば、真の理解が得られたはずである。

本稿では、第2節で述べた時制と相の定義に基づいて、2つの時制と3つの形式的相の体系を提案する。形式的相とは相性を表すための文法形式であり、単純相、完了相、進行相がある。具体的には、動詞形態、「have + 過去分詞」、「be + 現在分詞」が各々の相を実現する。ポイントは単純相を設定することである。

形式的相が表す相性は動詞の種類によって異なることがあるが、標準形としては達成動詞を想定する。達成動詞の場合、単純相、完了相、進行相は各々、事態の存在、完了、進行の意味を表す。表4はsing a songを例にとったパラダイムである。

表4 本稿が提案する英語の時制と形式的相

	現在時制	過去時制
単純相	sings a song	sang a song
完了相	has sung a song	had sung a song
進行相	is singing a song	was singing a song
(完了進行相)	(has been singing a song)	(had been singing a song)

表4の横軸と縦軸(時制と相)は、直示性の有無によって区別される。通常、何かを「指し示す」ためには、その対象を外から眺める必要がある。時制は、話者が当該の時間を外から見て、それが話者自身のいる時間であるか、あるいは話者のいない時間であるかを決めたことを合図する文法範疇である。

すべての相は直示性の欠如を特徴とし、時間の内側を見ることを合図する。時間の内側を見たら事態の存在が見えた、という場合には、話者は事態の存在を外の視点で見ていることになる。時間の内側でありながら事態の外側。これを表すのが単純相である。

これまでの文法研究では、単純相は相として認識されてこなかった。ある文が完了でも進行でもない事態に言及している時には、その文の時制だけが記述の対象になった。しかし、事態の時間的位置と事態の時間的性質は別のものであり、時制と相は別のものである。確

かに英語の文に時制は不可欠であるが、相もまた不可欠である。文を発する話者は、時間について述べたいのではなく、事態について述べたいのである。何らかの事態が必ず存在する。そうでなければ、そもそも文を作る動機がない。He sings a song が現在時制であることとは別に、これが単純相であることを文法上で認めることが必要である。

完了相は、話者が事態1の内側にまで目をやり、そこにもう1つの先立つ事態2が存在することを事態2の外側から認識したことを表す。完了相が「先立つ時間 (anteriority)」を含意するのはこのためである。しかし「先立つ時間」は直示的ではない。

3つめの進行相は、事態1の内部が区切りのない連続体を成していることを合図する。事態1の内部に始点と終点は存在せず、完了に向かう状態変化だけが見える。He is singing a song では、歌うという行為が終わりに向かって進行している。その一連の状態変化を分節することはできず、話者はこれを均質的な状態の連続と見る。

こうして外と内の視点という同じ原則によって、いわば入れ子式に時制と相が体系づけられる。これは英語における論理的一貫性の実例と言える。

表5 時制と相に見る方法の一貫性

時制：外の視点。時間1と時間2（基準点）の前後関係を表す。
相：内の視点。時間1の中の、事態1のあり方を表す。
単純相：外の視点。時間1の中の事態1を、点として表す。
他の相：内の視点。時間1の中の事態1を、構造として表す。
完了相：外の視点。事態1の中に事態2を認め、これを点として表す。
進行相：内の視点。事態1が進行中であることを表す。

4.1. 単純相

ここからは例文にあたって解説する。まず単純相においては、事態は幅のある時間の中で点として存在する。点として存在する事態は1回限りのこともあれば習慣的であることもある。この曖昧性は、文中の助動詞や副詞、あるいは文脈によって解消することが多い。

- (4) I used to wake up and see camel shapes in the folds of my bedroom curtains. [Baxter:125]
 (眼を覚ますといつも、寝室のカーテンのひだが駱駝の形に見えたものよ。)

[田口:160]

(4)では *used to* が習慣の読みを指定する。*used to* がなければ1回の動作を表す戯曲のト書きかとも思えるところだ。1回か習慣かを区別するのは文法の仕事ではない。単純相は「点」の存在だけを合図するものであり、それが当該の時間に1つだけ存在したのか、あるいは同じ点が繰り返し出現したのかは解釈に属する問題である。

事態の存在だけを認識する単純相は、次のような場面で効果を発揮する。

- (5) *She's gone! Somebody took her!* [刑事コロンボ『消えた花嫁』]
(彼女がいなくなった！ 誘拐された！)

これは刑事コロンボの甥がおじであるコロンボに叫ぶ場面である。この後でコロンボが消えた花嫁の父親に誘拐の事実を告げる場面でも *Your daughter was kidnapped* と言う。誘拐の時点が確定されておらず「現在との関連性」があるにも関わらず、事件が起きた時点に注意が向いている。このような場合には、できごとを外側の視点でまるごと捉える単純相が合う。ちなみに *She's gone* の *is* は状態動詞である。状態動詞の単純相は、点というよりは境界のない広がり存在を確認したことを表す。

次の(6)と(7)は、日本語の母語話者が英作文をする時に、つい過去時制または現在時制完了相で言いがちな慣用表現である。

- (6) *What brings you here?* (何をしに来たの?)
(7) *You win.* (気味の勝ちだ/負けたよ)

これらの文は、あなたが今ここにいる、今この瞬間に君の勝ちが見えた、という事実の存在を話者が外から見て単純相で合図している。

- (8) *So that is Elizabeth's Robin. I don't think I ever saw a portrait of him before.* [Tey:25]
(その御仁がエリザベスのロビンか。肖像画を見るのは初めてだと思う)

(8)は、16世紀の人である、エリザベス1世の寵臣レスター伯爵の肖像画を見ての発話である。肖像画を見てしまった今となっては「見ていない」という事態が完全に過去のものとなった。そのことを過去時制が表している。その過去の時間の中を覗いてみれば、「肖像画を見る」という事態が存在しなかった。こちらは単純相が表している。

4.2. 現在時制の完了相

第3節で見たように、現在時制完了相は現代の英語学者たちを悩ませてきた。しかし、すでに伝統文法の時代にイエスペルセンは、現在完了は一種の現在時制であると明言している。イエスペルセンによれば、現在完了には、retrospective present と inclusive present がある。前者は、過去のできごとの結果としての現在であり、後者は、過去から現在まで続いている状態としての現在である (Jespersen 1931:47)。

近年ではパーマーが、過去の事態の「現在との関連性」を強調した。本稿でも、現在完了は「現在と関連する過去の事態を含む現在」を表すものとする。

- (9) I always have heard the cyanide leaves no trace if you wait long enough. [Christie 1985:103]
(シアン化物は、時間が経つと痕跡が消えると聞いています)

(9)では、話者は時間を外の視点でとらえて現在時制を選び、次に内の視点で現在の時間の中を見ている。その時間の中には事態1がある。事態1とは、自分がシアン化物について耳にするという事態である。ここでやめれば I always hear... という単純相になるが、さらにこの事態1の内側を見ると、そこには先立つ事態2があり、シアン化物について以前に聞いたことに気づく。そこで I always have heard... という。この時には、話者の視点は事態1の中にあって事態2の外にある。つまり話者は事態1の中の事態2を外側から認識している。事態1は現在に属するため、事態1の中の事態2もまた現在のことがらになる。こうして、幅のある現在の、幅のある事態の中に時間的な構造が出現する。

単純相の場合と同様に完了相でも、事態2が1回だけあったのか複数回(習慣的に)あったのかは曖昧である。しかし always という語が事態の習慣性を合図している。always がなければ「聞いたことがある」という1回の読みとの間で曖昧になるところだ。

いずれにしても現在時制の完了相が、過去を取りこんだ現在を表すことに変わりはない。過去時制を選ばなかったのは、シアン化物云々が自分の現在の知識であると思えたからだ。過去の特定の時に聞いたことを強調したい場合は、過去時制単純相にする。

たとえ主語が故人であっても、現在への影響が続いていれば現在完了が合う。

- (10) Newton has explained the movements of the moon. [Jespersen 1931:66]
(ニュートンが月の運動を説明した/している)

これを Newton explained... と過去形で言うと、まるでニュートンの説が現在では否定され

顧みられないかのように聞こえる (Jespersen 1931:66).

次の4例も、現在時制完了相が現在を指向すること、現在の事態1が構造を持っていること、構造には先立つ事態2が含まれることを示唆している。

- (11) You have forgotten me, dear. [Christie 1985:6]
(私をお忘れですよ)
- (12) “Do I know you?”—“No. We haven’t met.” [Baxter:120]
「おじさん、ぼくの知ってる人？」 「いや、きみに会うのはこれが初めてだ」
[田口:154]
- (13) I think the time has come for all of us to pool our information. [Christie 1994:24]
(こうなったら、全員が知っていることを持ち寄って考えよう)
- (14) Some idiot has put diesel in the tank instead of petrol. Which of you did that?
[Declerck:319]
(ガソリンでなくディーゼルを入れた阿呆がいる。お前らのうち誰だ?)

(11)では「これまで私を仲間に入れるのを忘れていた」という先立つ事態が「これから」を含む現在の中に存在している。(12)でも「会わなかった」という過去の事態が「これから知り合いになる」であろう現在に含まれている。「時が到来した」と言う(13)でも、その到来した時間は現在に属する。(14)では第1文で話者が現状に注目し、過去の行為を現在に取り込んだ。この行為が実際には過去の時間に起きたことは第2文が明言している。

どの文でも、話者は現在の事態を内側から見て、その中にもう1つの先立つ事態があることを外側から認識している。この「もう1つの事態」は過去と遮断された現在の事態の中にあり、直示的な過去の時間とは関係をもたない。

4.3. 過去完了の2つの意味

過去時制の完了相が「過去の完了」と「過去の過去」の両方を表すことは従来から指摘されてきた (Jespersen 1931:81; Palmer 1965:99; Quirk et al. 1985:195-6; H&P 2002:146; H&P 2005:50; Hewings 2005:10; Declerck 2006:445)。

本稿では、英語には「過去の過去」を表す文法範疇が存在しないため過去時制完了相が代用されると考える。「過去の過去」が文法化されなかったのは、これを明示的に表現する必要性があまりなかったからであろう。話者は必然的に現在に存在する。現在と過去について語りたい場合は多くても、過去の過去について語らねばならない時は多くない。特に

発話時という立ち位置を守る英語の話者には、遠い過去はよく見えないのである。

「過去の完了」の例からは、完了相にとって先立つ時間が絶対的に必要ではないことが見えてくる。重要なのはむしろ2つの事態の外と内の関係である。

(15) Back when Richard and Alice were engaged, Sam had tried to talk Richard out of it.

[Beattie:3]

(昔リチャードとアリスが婚約していた頃、サムはリチャードに、婚約を思い直すようにと勧めたことがあった)

(15)の下線部は、Sam tried...ではなくSam has tried...をシフトさせた形である。リチャードとアリスの婚約中という過去の時間の中の不確定な時点にサムが忠告したのであって、婚約中という過去の時間に先だつ時間に忠告したのではない。つまり(15)の話者は、過去の時間の中の、婚約中という事態1の中に、忠告という事態2の存在を認めている。事態2は事態1に先だつ必要はないのである。次の(16)も同様である。

(16) She hadn't seen him since she worked for him one summer in Seattle ten years ago.

[Carver:209]

(彼女は十年前の夏、シアトルにいるときに彼の下で働いていたのだが、それ以来一度も二人は顔を合わせたことはなかった)

[村上:155]

(16)で、彼女は10年前の夏以来彼に会っていない。つまりworkedよりhadn't seenの方が時間的に後である。しかし小説が過去時制を基準にしているためhasn'tがhadn'tにシフトした。まさにbackshifting, 時制の一致である。

これらの例は、H & Pの提案に反して、完了相が時制の一種ではないことを証言する。完了相は2つの時間の前後関係ではなく、1つの時間の中の事態の完了を合図する。

次は「過去の過去」の例である。

(17) Grant was bed-borne, ... because he had fallen through a trap-door. [Tey:12]

(グラントは、ベッドの上の生活を余儀なくされていた。はね上げ戸の穴から落ちたからである)

bed-borne という状態に先立つ時点をhad fallenが指示している。基準が現在であればGrant

is bed-borne, . . . because he fell through a trap-door となるところである。

4.4. 法助動詞と完了相

完了が相であって時制でないことは法助動詞の文脈からも明らかである。法助動詞を用いた動詞句には、過去時制の完了相に見られるのと同じ曖昧性が見られる。

(18) So whether he loved her or not, she must have been a companion for him. [Tey 50]

(彼が彼女を愛していたかどうかは別にして、彼女が彼の伴侶であったことは間違いない)

(18)で、love と be a companion は過去の同じ時間の事態を表している。しかし本稿の冒頭で述べた法の定義に従えば、must have been a companion は話者が心的空間で推測していることがらである。話者は必然的に現在に存在し、そのため話者の心的空間は必然的に現在時制で表される。そこで本来なら was a companion と言うべきところを現在時制にシフトして have been a companion と言った。いわば have been は「was マイナス時制」である。過去に言及しながらも過去時制ではないもの。それが現在時制完了相である。

4.5. 進行相

英語学で伝統的に認められてきた進行相は、動詞の種類によって豊かに差異化された相性を表す。完了相が一律に「事態の完了」を表したのに対して、進行相は、達成動詞の場合に文字通り「終点に向けての行為の進行」という相性を表すかと思えば、到達動詞では「一瞬の変化に向けての状態変化」を、活動動詞の場合には「いずれは終わる活動の持続」を表すなど、相性が多様である。また、始まりも終わりも含意しない状態動詞は、進行相で表すことは基本的に許されない。

相性が多様であるとはいえ、進行相が表す状況は一律に、始点と終点を含意する。基本的に、進行相は人の行う行為を描写するための工夫である。行為は人が意思で始めたことであり、やがては終わる。このことから、英語の進行相は、状況の意思性、状況の変化、それに一時性を強く含意する。次の例は典型的である。

(19) “No,” he says, but she is already dialing. [Baxter:124]

(「そこまですることはないよ」と彼は言う。が、彼女はもうダイヤルをまわしている)

[田口:158]

- (20) I wasn't getting through to him, I could see that. [Carver:225]
(話がちゃんと通じているようには私には思えなかった) [村上:180]
- (21) She was heading toward a boil. [Carver:218]
(妻は今にも爆発しそうだった) [村上:170]

(19)の dial は終点を内蔵する動詞である。「彼女」の意思でダイアルをまわす行為が進行し、やがて終わる。(20)でも、意思の疎通という行為の終点を目指して「私」が努力している。(21)では「彼女」は意思にも似た感情に突き動かされて沸騰点につき進んでいる。

意思性は英語の進行相の重要な特徴である。未来のことがらでも、意思があれば I'm leaving for Paris next week とすることができる。心の中で出発が始まっているからである。一方、*The sun is rising at 6:00 a.m. tomorrow は非文である。無生物の場合には、確定した予定であれば The sun rises... と単純相で言う。

意思が欠如していても、変化などダイナミズムがあれば進行相が合う。文法書の定番である He is resembling his father every year (彼は年々、父親に似てくるね) などはこの類である。次の(22)と(23)もこれに近い。

- (22) His chest is glowing and aching, and he feels displaced. [Baxter:121]
(胸のあたりに不快なほてりがあって、しかも自分が何か場違いなところにいる
ような・・・) [田口:155]
- (23) But it does remind me a little of the trouble we are having with the district nurse.
[Christie 1985:101]
(でも確かに、地区看護師とのもめごとに似たところがありますね)

(22)の原文には、ほてりと痛みが「彼」を責め苛んでいる含意がある。(23)からも、人の交流や心の葛藤が伝わる。日本語の訳文の方ではそういったダイナミズムが感じられず、静的な状態の描写になっている。

意思でコントロールできる状態もまた進行相で表すことができる。一時的かつ故意にその状態を作り出していると解釈できるからである。

- (24) Aren't you being a little unkind? [Christie 1994:16]
(ちょっと意地の悪い見方じゃありませんか)
- (25) You're not being silly, are you? This isn't one of your moods? [Baxter:118]
(それはよくよくのことなんでしょうね？気紛れなんかじゃないんでしょうね)

これらの条件が整わない時に強引に進行相を用いたのが次の例である。(26)の進行相からは異常性が伝わってくる。

(26) You're seeing things.

[Baxter:123]

(目の錯覚じゃないのかね)

[田口:158]

この4.5で挙げたすべての例において、進行相は臨場感とダイナミズムを伝える。進行相においては、話者が時間の中の事態1の中を見ている。そこには先立つ事態2は存在せず、切れ目のない事態1が、いずれ行き着くはずの終点に向かって動いている。

5. 達成動詞と普通名詞(外と内の視点ふたたび)

以上の例が示すように、事態が何らかの点で「終点に向けての行為の進行」に類似していれば進行相を用いることができる。この「終点に向けての行為の進行」という相性を典型的に表すのはいわゆる達成動詞である。英語の時制と相の体系は達成動詞を想定したものとして理解できる。

本稿では、一般的に受け入れられている4つの状況タイプと4種類の動詞アスペクト類を想定している(本稿で呼ぶところの「事態」と、状況タイプの議論で一般的に用いられる「状況」は同義である)。通常、状況と動詞類は同じ名前と呼ばれ、たとえば達成という状況を表す動詞句は達成動詞と呼ばれる。³

表6 状況/動詞アスペクト類

状況/動詞類	例
達成動詞(accomplishment verb):	rob a bank; paint a picture; run a mile; grow up; ...
活動動詞(activity verb):	swim; run; chat; dance; paint; grow; ...
到達動詞(achievement verb):	fall asleep; notice something; reach the summit; die; ...
状態動詞(state verb):	know the answer; have blue eyes; like ice cream; ...

³ これらは、ヴェンドラー (Vendler 1967) で4つの動詞アスペクト類として提案されたが、今日では4つの状況タイプという理解が定着してきている。

「達成」とは、有意思の行為を典型とする、時間的な始点と終点のある状況である。「活動」は持続的な行為あるいは持続的な変化であり、やがては終わるという含意がある。「到達」は一瞬の変化である。「状態」とは、始まりも終わりも含意しない、すでに成り立っている状態を言う。これらの状況タイプは通常、普遍的であると想定されている。

これらの概念が普遍的か否かの議論は本稿の域を超えるが、少なくとも英語では、達成の状況タイプを想定することで相の体系が理解し易くなるのは確かである。第4節で見た諸々の例文でも、達成という標準に照らして他の状況タイプが理解でき、文が表す相性を説明することができた。その達成という状況は、外と内の視点によって可能になる。

認知言語学で言われているように、人の外界認知において空間の理解が時間の理解に先立つとすれば、事態を外と内の両面から見る方法は、2.2の例文に登場した「学校」「ジョー」「猫」など具象的存在を外と内の両面から見る方法からの類推によって得られたと考えられる。実際に、具象物を表す普通名詞と、人の行為など終点をもつできごとを表す達成動詞は、どちらも有界性という外側から見た特徴と、非均質性という内側から見た特徴によって認識される点で類似している。

たとえば「自転車」はハンドル、サドル、軸、車輪、荷台など非均質的な部分で構成される。どの部分もそれ単独では自転車とは呼ばれず、部分を合わせた全体だけが自転車である。自転車は空間的存在であるが、同じ方法で「銀行を襲う」などの行為を見ることができ。行為は時間的な存在であり、完了すると同時に消えてしまうが、銀行に入る、カウンターに近づく、凶器などで脅す、現金を鞆に詰め込む、逃げるなど刻々と変わる局面が非均質的な部分を構成しており、また、行為の全体だけが「銀行を襲う」と呼ばれるという意味で有界性をもっている。

表7 具象物と行為の類似性

	有界性[外の視点]	非均質性[内の視点]
普通名詞【例】bike	○	○
達成動詞【例】rob a bank	○	○

ちなみに普通名詞の複数形と物質名詞は、境界のない均質的な広がりを表す。これと並行して活動動詞は通常、時間的終点があはつきりしない均質的な行為を表す。

このように、名詞類と動詞アスペクト類には構造的な類似性があり、それぞれ普通名詞と達成動詞を中心に体系づけられている。このことは、空間と時間が外と内の視点という

原則によって理解されることを示唆している。

以上、本稿ではおもに英語の相に関して観察と考察を行い、「外と内の視点」という原則が英語の時制と相の体系を支えていること、名詞と動詞の関連性をも説明すること、英文法のその他の部分でも働いていることを論じた。

特に相については、単純相を設定することの必要性を論じ、その上で達成動詞を想定した2時制3相の体系を提案した。この体系と「外と内の視点」の原則を組み合わせることにより、近年の英語学研究における謎であった「過去形と現在完了形」を「過去時制単純相と現在時制完了相」として差異化することができた。

冒頭で言及した英語の論理的一貫性については、少なくとも時制と相の文法には、自然の理に適った原則が一貫して働いていることを観察した。

参考文献

- Bache, Carl. 1994. Verbal Categories, Form-Meaning Relationships and the English Perfect. Carl Bache, Hans Basboll, Carl-Erik Lindberg (eds.), *Tense, Aspect and Action*. Berlin: Mouton de Gruyter, 43-60.
- Berk, Lynn M. 1999. *English Syntax*. Oxford: Oxford University Press.
- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- _____. 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Declerck, Renaat. 2006. *The Grammar of the English Verb Phrase, vol.1: The Grammar of the English Tense System*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Dixon, R. M. W. [1991]/2005. *A Semantic Approach to English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Greenbaum, Sidney, and Gerald Nelson. 2002. *An Introduction to English Grammar*. London: Pearson Education.
- Griffiths, Patrick. 2006. *An Introduction to English Semantics and Pragmatics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Harder, Peter. 1994. Verbal Time reference in English: Structure and Functions. Carl Bache, Hans Basboll, Carl-Erik Lindberg (eds.), *Tense, Aspect and Action*. Berlin: Mouton de Gruyter, 61-79.
- Hewings, Martin. 2005. *Advanced Grammar in Use*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hovav, Malka Rappaport. 2007. Lexicalized Meaning and the Internal Temporal Structure of Events.

- Susan Rothstein (ed.), *Theoretical and Crosslinguistic Approaches to the Semantics of Aspect*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 13-42.
- Huddleston, Rodney, and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- _____. 2005. *A Student's Introduction to English Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press. (高橋邦年 (監訳) 2007. 『現代英語文法』 Cambridge: Cambridge University Press.)
- Jespersen, Otto. [1931]/1983. *A Modern English Grammar: On Historical Principles, Part IV*. 名著普及会.
- _____. [1938]/1978. *Growth and Structure of the English Language*. Oxford: Basil Blackwell.
- Leech, Geoffrey N. 1971/1998. *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- Lyons, John. 1977. *Semantics: 2*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Palmer, F. R. [1965]/1997. *The English Verb*. London: Longman.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Reichenbach, Hans. [1947]/2005. The Tenses of Verbs (section 51 of *Elements of Symbolic Logic*). Inderjeet Mani et al. (eds.), *The Language of Time*. Oxford: Oxford University Press, 71-78.
- Saeed, John I. [1997]/2009. *Semantics*. Chichester, West Sussex: Wiley-Blackwell.
- Vendler, Zenon. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, New York: Cornell University Press.

文学作品

- Baxter, Charles. 1985. *Through the Safety Net*. New York: Vintage Books.
(亀井よし子・田口俊樹 (訳) 1992. 『安全ネットを突き抜けて』 早川書房.)
- Beattie, Ann. [1974]/1997. *Snakes' Shoes. American Minimalism: Four Short Stories*. Tokyo: Asahi Press.
- Carver, Raymond. 1981/1989. *Cathedral*. New York: Vintage Books.
(村上春樹 (訳) 1997/2008. 『レイモンド・カーヴァー傑作選 Carver's Dozen』 中央公論新社)
- Christie, Agatha. 1985. *Miss Marple: The Complete Short Stories*. New York: Berkley Books.
_____. [1944-1956]/1994. *The Mousetrap and Selected Plays*. London: Harper Collins Publishers.
- Tey, Josephine. [1951]/1995. *The Daughter of Time*. New York: Scribner Paperback Fiction.

Aspect in English

Kiyoko SOHMIYA

This article argues that the system of tense and aspect in English is organized by the principle of “internal/external perspective”, with greater focus on aspect. The definition of tense and aspect is adopted from Comrie (1976; 1985): tense is deictic; aspect is internal.

Despite Comrie’s contribution from the field of language typology, the relationship of tense and aspect continues to puzzle contemporary researchers in English linguistics. The English present perfect, in particular, has received various treatments from different researchers in recent times. If the present perfect form represents an aspect, how can it possibly refer to anterior time? If it is a form of tense, what kind of tense is it?

The answer to these queries is that it is a form of aspect. By stipulating a system that consists of two tenses (present and past) and three aspects (simple, perfect, and progressive), together with the hypothesis that the principle of internal/external perspective permeates the English tense-aspect system, we can successfully describe, and explain, the uses of the three kinds of aspect.

For example, the present perfect aspect, as in *he has sung a song*, signals that the speaker is looking into the time of event, i.e., the present time. In this sense, it represents an internal perspective, like the other two forms of aspect. Inside this time zone exists an event, i.e., the event of him singing a song. The speaker looks into the internal constituency of the event (internal perspective), and finds that the event of the singing occurred in some anterior, and yet non-deictic, time. He thus sees the event in its totality (external perspective).

In other words, the perfect aspect indicates an internal, internal-external perspective. The simple aspect, as in *he sings a song*, indicates an internal, external perspective, and the progressive aspect, as in *he is singing a song*, indicates an internal, internal perspective.

The internal/external perspective is also observed in other parts of English grammar, not to mention other languages. In fact, it can be part of natural logic. The consistency and simplicity of the English tense-aspect system as outlined in this article suggests that English is a language whose grammar favors rigor and elegance at the same time.